

# 牛女だより

～旧暦霜月の号～

2010年12月発行  
牛女舎  
&  
まんまるの木

二〇一〇年「まんまるの木」月記 風だより

**一月** ★自由ヶ丘のカフェギャラリー「るなん」の福井暁世・ふく子夫妻の「絵付けの焼物展」で華やかに新年明けた**まんまるの木** ★若い愛の姿を捉えた一風変わったじいさんカメラマン（あまのとしやさん）の写真展「二人」★恒例のシャyson「ミモザの集い」や「長岡純重さんのライブ」が花を添え。

**二月** ★駒沢生活実習所の方たちの可愛くて素敵なお手づくり小物の即売と絵や作品の展示会で夢いっぱい**のまんまるの木** ★旧暦の正月は今年も素描絵師「飄斎」（小塚さんだよ）さんの神楽素描展示、なんと二七〇点余。さやさと今年もまんまるに神風が…。一階には石原賢治氏が描く美しい絵も。

**三月** ★神楽素描展示の中、なぜかスペインからの風、**まんまるの木** フラメンコライブ。息も絶え絶え一周年・牛フラメンコ！ あ、それ、それ、と調子に乗って炭坑節も。★超マニアックな三上敬視さんの神楽ビデオジョッキー。杯片手にエンドレス。

**四月** ★**まんまるの木**の春告鳥は市ノ瀬絵里子さん。かわいらしい「布草履」に雪国から伝える「こんこん草履」！ ★地元池尻「道楽会」主催の「ぶらり道楽―世田谷見聞録を謎って歩こう」の終着は「野菜入りしらすたまげんざい」。★沖縄のサンゴ礁を守るチャリティーライブでアシエラさんとお仲間たちのベリーダンスも素晴らしかった。

**五月** ★十一月に他界されたコロンビアライト師匠の談笑講座。ほんのひと時の大切なお話。★若い世代に竹とんぼづくりを伝える祐天寺のスーパーおじいちゃんII小杉栄さん。昭和一桁生まれII人生の先輩たちに頭が下がる**まんまるの木** ★南からのさわやかな風は那覇の真栄城レイコさんの着物リフォームの日傘の展示「サワフジの庭」。★下地恵美子さんの舞台朗読「麦藁帽子」にほろりと感動。

**六月** ★かつての地元人、岩城やすおさんの五行歌展に取り持たれ、途切れていた地元の糸が紡がれた**まんまるの木**。「池尻まんまる織り」ができるといいな★梅雨空をよそにさわやかなギターデュオ『CHL ESTE』&ミウラ1号のまんまるデビュー。★井上貴子さんのヒーリングフォト展とこちよい風が吹く。

**七月** ★デュオ・リュタンの夏の夜のバロック。ヘッドライトの明かりをバックに、古に遡る時の流れにうつとりと、夜風漂う**まんまるの木** ★「JINNO」さんの甘く切ない歌声 ★井上貴子さんの座ってできる簡単ヨガなどなど、ヒーリングムードが満載。★南からは宮古島から椿の香る風も吹いてきた。

**八月** ★梅津裕子さんと山崎つかささんの「大人のたのお話会」②。平和の尊さをもう一度と、「窓際のトットちゃん」と「可愛そうな象」の二編。★南の風は北風を呼び「越後替女唄」の伝承者須藤玲子さんが**まんまるの木**にやっていた。消えそうな「ともし火」を繋ぎとめようとする真摯な姿に感動！

**九月** ★世田谷ウオーキングフォーラム『絵葉書・栗』原画展。「イラストレーター君。君にこんな線が描けるかい？」★ストイックなボクサーの肖像「富田浩二」写真展。「見たまえデジカメ君、こんな優しくて深みのある写真が君に撮れるかい？」★染めでは難しいさわやかな緑は垣花さんのウージー（サトウキビ）染め。★勾玉の輝きを放つ琉球舞踊。人の技が舞い踊る**まんまるの木**。

**一〇月** ★月桃の実を抱えてやってきたのは、古布の小物展。地元下馬在住でも沖縄出身の山崎トミ子さん。モチーフは烏瓜と柿。★ちくちく鳥「森のおまつり」は本山理咲さん描き下ろし絵本の原画とみくふあいゆくによる羊毛人形や手作り雑貨の展示会。誰もが笑顔の**まんまるの木**。★平井貴さんと大鳥居明子さんのギター&フルート。ランチタイムコンサート。おなかも心も思わずにつこり。

**十一月** ★イタリアからマウリーツィアさん。ワインで色づけした腐食版画が。★中村里美さん「歌と語りのピースライブ」★おおらかでたくましい自然を感じるAYUMIさんのライブ。歌声は国境を越えて希望を運ぶ。★「竜じい（真夏竜さん）」の民話の小部屋。宮内庁楽師豊剛秋さんの笙の音。池原昭治さんの童絵の展示。半分幸せそれで十分**まんまるの木**

**十二月** ★大人のためのおはなし会③『100万回生きたねこ』』ことりをすきになった山』誰かを愛すること、初めてわかる「生きる」意味。そして今年もあと少しとなり、走り続ける**まんまるの木**。★山本シカエの元気がでる油絵は最終日の25日まで。19日は「CHEL ESTE」クリスマスライブ。★23〜25日。きつと街へ出たくなる素敵帽子展。最後の最後まで遊びに来てください！

★新年は模様替えのために一月一八日からです。  
★可愛らしいうさぎづくりで幕開けですよ。  
★来年もどうぞよろしくお祈いします。

# まんまるの広場



## 「ちよつと、いつ話」

いわきやすお

12月3日は、発達した低気圧の影響で師走の嵐が吹き荒れた。激しい風と雨は朝の通勤電車にも影響をもたらせた。私は、小田急線で神奈川の海老名から下北沢まで通っているが、突き刺さるような雨が電車の走行スピードを落とした。海老名市では、1時間の雨量が72ミリと、観測史上最多を記録したという。12月の雨としては番狂わせともいうものだった。乗車した準急電車は、停車する駅ごとに大勢の乗客を呑み込んでいった。乗車率は200%を超えていたと思う。そして、いつもの所要時間より40分遅れて下車する下北沢駅に着いた。

下北沢駅は井の頭線への乗り換えの関係もあり、下車する人も多い。ドアが開くと堰を切ったように降りる人が押し出された。怒涛の勢いといった形容が当てはまった。私も降りてホームを歩いていくと人集りが見えた。近寄ると、若い女性が電車とホームとのすき間に片足を落としていた。駅員が駆け寄り、女性の体を引き上げ抜け出しをはかるがダメだった。気の毒というか哀哀想に感じた。そうしたところ、駅にいた人たちが集まって、停車している電車の車体を押し始めた。傾きさせることで、挟まったすき間にスペースを生み出そうという救出作戦である。人数にして20人はいいたと思う。私もその仲間に加わった。「イチ、ニイのサン」の掛け声と力を合わせて押すと、車体は揺れて傾き、わずかなすき間ができて足の引き上げに成功した。一同ほっとしたのである。

被害にあった本人からすれば、パニック状態であったに違いない。救出後、泣きべそをかいていた。無理もないことである。でも、いざとなったとき、人はベクトルを合わせた行動することを知らされた。いつもは満員電車のストレスで、喧嘩がおこったり険悪な雰囲気になることがしばしばだが、その日の朝はちよつといい場面に出会わせた。人間、捨てたもんじゃない、と暖かな気持ちになりながら私は改札に向かった。

## 「まんまるの木」に寄せて②

黒田 久

からだがフワリ、フワリと雲の上をとび跳ねるように前へ前へと進んでいく。王朝絵巻を見ているような寝殿造りの邸宅の庭を横切っているのだろうか。

やがて行く手に川が見えてきた。わずかではあるが水の流れはある。

そのまま渡って渡れない川ではない。その川の前で立ち止まり、しばらく考えた後、流れに足をいれた。

そのとき川のむこう岸から、「そこで何をしている。」という声があった。聞き覚えのある声である。亡父の声である。いつもの穏やかな声で私に語りかけてきた。

私は足を川に入れたまま亡父の声のする方に黙って顔をむけた。

「こっちへ来てはいけない。」再び亡父の声があった。

私は戻ろうともせずその場に立ったまま、返事をするこ

なく、声のする方をむいていた。

「子どもをほったらかしてこっちへ来てはいかん！」

今度は怒気を含んだ、いままでに聞いたことのない鋭い口調だった。

その言葉に私は、「はっ！」となり、慌てて川から飛び出た。そして……目を醒ました。

あたりは暗くなっていた。蛍光灯が点いている。窓外は真っ暗だった。

「ここはどこだろう？」

あたりを見渡した。室内の様子からどうも病院のようである。

しばらく蛍光灯の灯りをじっとみつめた。全然まぶしくな

い。

どうしてここにいるのか必死で思い出そうとした。

しばらく考えるうちにすこしずつ思い出してきた。

職場で倒れ、救急車でこの病院まで搬送されてきたのだ

た。

病院に着いてからのことは殆んど憶えていない。

今見た夢は、生死の間を彷徨っていたのだ。

彼岸へ行くこうとした私を亡父が救ってくれたのだ。

職場復帰し、六年間勤めた後、定年を五年残し退職した。退職後、悪いながらも体調を取り戻した。

ところが今年(平成22年)の3月、かかりつけの内科医から白血病の可能性があることを告げられた。

がんセンターで精密検査を受けた後、検査入院した。

抗がん剤治療で白血病を抑えられるか、重篤な副作用が出ないかの検査である。

約一ヶ月の入院中、私はがんとそして「死」と向き合うことになった。

幸いなことに私の白血病は慢性期の早期発見であったから即「死」ということはなかった。

「死」が目前にせまったわけではないが、向き合うことにはなかった。

約8年前「三途の川」を渡ろうとした私は亡父によって、それから我が子によってでもあるが、生命をとりとめた。

あの時、なぜ亡父が出てきて亡母は出てきてくれなかったのだろうか。亡母は私を愛してくれなかったのだろうか。

そんな疑念も湧いた。亡母の実家の跡取りであったにもかかわらず、妻の実家を継いだ私が憎かったのだろうか。

目頭がたまらなく熱くなってきた。

亡父は五十歳の私を「生きよ」と救ってくれた。

亡母は、それほどつらいなら「こっちへ来なさい。もうゆつくり休みなさい。」と手を差しのべるために出てこなかったのだ。そう思う。

親の子に対する愛情はいろいろな形があるが、私の両親はこのように具現してくれた。

わが身を滅んでも、目に見えない姿となって我が子を見守ってくれていることを二つの病気を通して思い知った。

完

みんなでわいわい、まんまるの広場！  
皆さんのおたより、エッセイ等お待ちしております。